

「情報力」何を意味するか

「データは情報ではない。情報の原石にしかすぎない。原石にすぎないデータが情報となるには、目的のために体系化され、仕事に向けられ、意思決定に使われなければならない」

情報の専門家とは、道具としての情報をつくる者である。

だが、道具としての情報を、何のために、いかに使うかを決めるのは情報のユーザーである。

そのためには、ユーザー自身が、情報に精通しなければならない。

ところがほとんどの者が、自らの意思決定において情報の持つ意味を考えていない。

情報は、人間の行動に結びついて初めて知識となる。

かつては、とにかく情報を持つことが勝利への道だった。

軍隊でも企業でも同じだった。

ところが今では、誰もがクリックするだけで世界中のあらゆることについて情報を得られる。

その結果、情報力とは、情報入手する力ではなく、情報を解釈して利用する力を意味することになった。今やユーザー自身が、情報の専門家にならなければならない。

「コンピューターを扱う人たちは、より速いスピードとより大きなメモリーに関心を持つ。

しかし、問題はもはや技術的なものではない。

いかにデータを利用可能な情報に転化するかである」

未来への決断」ドラッカーより参照

アルビン・トフラー氏は、「パワーシフト」という著書で、情報を持つ者が力を持つと言いました。

人間の歴史を振り返ると、権力を持つ者は誰か？

つまりは「情報」を持つ者が、力を持つ・・・と洞察しました。

現代の21世紀では、消費者です。生活者です。

インターネットの発達により、誰でもどこでもいつでも、発信、受信することが出来るようになりました。

そこで、大きな問題になっていることがあります。

「情報があふすぎて」困っているのです！

どれが本当に正しい情報か？ 必要な情報か？役に立つ情報か？

訳がわからなくなっているのです。混乱しています。

多くの情報を自分に役に立つようにアドバイスしてくれる「支援業者」が必要不可欠になったのです。

<経営のヒント>

データと情報、そして知識と智恵、

どこがどう違うのか？・・・ここにヒントがあります。

情報や知識が多くあっても、現実に役に立たないのです。

自分の目的に添った形で、意思決定のために役立つように「智恵」に変えなければ価値がありません。

情報はすべて、過去のものです。

大切なことは、未来です。

未来に向けて判断、意思決定する基準（メジャー）が智恵となります。